

『耕雲傑堂和尚之入室』 口語訳の試み(下)

菅 原 諭 貴

凡例

一、『耕雲傑堂和尚之入室』の本文は、鈴木鉦三氏編集の影印本を用いた。

一、上段には原文を掲げ、下段には訳文を記した。

一、原文は白文であるが、読解に資するため、句読点・返り点・振仮名等を付した。

一、施註は語句の意味を記すとともに、原文に用いられた出典を明らかにすることにつとめた。

一、仏教語・禅語の常套語として、「――」等の符号で記されている箇所、あるいは脱落または省略と思われる語句については、筆者の理解の及ぶ範囲で補足した。

『耕雲傑堂和尚之入室』口語訳の試み(下) (菅原)

一、訳文において、原文の意味を補う必要がある時は「〔 〕」を用い、語句の意味を補う時は、その語句の下に（ ）を用いた。

南英謙宗筆 『耕雲傑堂和尚之入室』(故大滝新藏氏所藏)

志空 一代有教有德者以上三氣不言能令有象乃
 什一開門五方共何地謝分私
 昌黎 沈三勃能空乃不乃上又怒上微誤耳使打
 去似是仁是商是掉臂會去
 大直 直心是乃場以多三身还在心中少更胸中念
 广一靈世袋三具
 能直 曲不藏其多打一團相便立身又平何靈化能依
 按至信位低以開眼者下下務人領斷作在而
 粗考 以弁兔相面前三多字擊披見乃直上見遠
 天鼻孔直下見五志藏化
 昌範 家門公昌上公乃乃三人有者北民家賴
 去珠 文殊助神子善醫藥訪象上庄時子什广在將戶
 不受灵山板 胎胎与上公諸部作生三喝个使打
 真相 千約上考不乃騰風發梳竟何格外靈機乃
 尋知已多即今底又多後故喝个亦喝
 安住不動靈相五則本為生打三看好乃引地

祖師 心与俱俱何河三觀以無与渡何打三拍職呼命
 知得實二路三高的開大屋三不隨通有广又在
 三片那生海鼓空人上接
 中簡 莫守寒若異中者有白雲字不少意旨如何
 歸根得旨通宗夫賊少故根作人上三靈心難色
 秀得底任你悟得底作人生打乎三按謂胡積
 赤更有赤指明在少指訊什人建
 世孝 燒一金殿燭上金上作人上三鼎中老手而可人
 祖禮 是曹源一滴少如何解解上下三靈化無三三已
 極源 至一滴水才打金出下三三之外法法滿目金山
 德安 客散雲機酒機無知實有作人上三職我語
 乃推觀時收在底合眼人相形如重腫子
 德同 因吹喚乃大意旨如何三喝少莫汝者身吾好上
 淨見 見明皇時何三祖称不了禍及鬼孫少喚作甚
 广禍三暗却眼睡少更及鬼孫大我身一修何人
 了月 月色射中有广三水双法法實何所為高身三何所為
 一人傳虛下人傳實意旨如何三畢竟空致無所得是
 名解為波羅密少乃住及乃是不名般三波羅
 密三人傳虛万人門更

祖問 昔和舒兒打三你尋和舒了云動打此地運
打你床更更有非一投至三掃地便行云不干其
宜担手是阿火火

義頓 義徒豐斗和意旨如何云隨頂盤問子尋藏
學乃歇仙乃教云曹溪門下不輪俗談
曹溪門下支信便馬竹便打

祖泉 泉声午夜後云當德了何名云天賜河漢句
秋叔冬藏你为什不在衣衣云隱蓋云後後茶
禪叔 俾先由地多人到乃什在衣衣者祖云俾而當
雲圓 雲頭教人悟沒甚意云何云這我語以非

去交 如何是去路云且行且語云

道負 元有到衣亂惠然得道云能眼云不見微也
也大身 少語訊云甚一處云有竟氣呵一流
祖寄 衣相與相問如何云閉眼也者合眼也者
祖教 祖教春回云 曹經盡云只一枝
祖心 不思善不思惡云當德了何罪个是の上座本末而
目云以兩手抄面門

祖透 直透方重問看信便嗎竹便打
祖山 山孤峻在地方云當德了何名起承云竹便打云
伊大擊擊振掃地便行用顧云是是是是是是是是是是

祖望 聖許亦不乃何云云竹在位前而後竹
乃順 莫建順相爭云云作用自無云打云猶一重問
祖祐 祖意教意云何是別云風云相破睡而云
淨法 祖竹是把門候作守那个門云云在山中雲深處
不降法一句連道云便後嗎竹便打

祖秀 衆病悉除住手段更治竟吾看云無怪情象
馬七你竹展兩手云我云你者有云君子不奪人所
好云山僧是不若今土云不是長虎竹云云便打
你云唔竹便打云拍胸脯云便打云云
祖秀 如何是汝同行見解云去年極今欲探解云

只依舊 善財隱雲相見以云云竟知云云見在
祖動云 輪担打不問如何云當退云云
祖輪云 世尊金網衣与勝云小衣相去多少云云能相
侍衣 續名主中主云主要主更衆諸訊看云能相
當今辨还勝前朝所吉者云便打云莫云極前
唱齋偈

『耕雲傑堂和尚之入室』口語訳の試み(下) (菅原)

惠蔵主⁽¹⁾

一代蔵教有⁽²⁾你舌頭上⁽³⁾一⁽⁴⁾。云、一氣不⁽⁵⁾言、能含⁽⁶⁾有象⁽⁷⁾。聞、為⁽⁸⁾什⁽⁹⁾一⁽¹⁰⁾開⁽¹¹⁾口門⁽¹²⁾。云、万靈何⁽¹³⁾処⁽¹⁴⁾謝⁽¹⁵⁾無私⁽¹⁶⁾。

昌知客

花無⁽¹⁾一語⁽²⁾、能⁽³⁾客侍者分上⁽⁴⁾又如何⁽⁵⁾。云、微笑⁽⁶⁾耳⁽⁷⁾。師便⁽⁸⁾打⁽⁹⁾云、似⁽¹⁰⁾是⁽¹¹⁾。似⁽¹²⁾、是⁽¹³⁾。即未⁽¹⁴⁾是⁽¹⁵⁾。掉⁽¹⁶⁾臂⁽¹⁷⁾出⁽¹⁸⁾。

大直

直心是道場時如何⁽¹⁾。云、身還在⁽²⁾心中⁽³⁾。聞、更胸中無⁽⁴⁾心⁽⁵⁾。云、一靈皮袋、皮袋一靈⁽⁶⁾。

能直

曲不⁽¹⁾蔵⁽²⁾直如何⁽³⁾。打⁽⁴⁾一圓相⁽⁵⁾便立身又手⁽⁶⁾。師云、援⁽⁷⁾花你任⁽⁸⁾援⁽⁹⁾花⁽¹⁰⁾。僧便低頭問訊⁽¹¹⁾出去⁽¹²⁾。聞、傍人領解作⁽¹³⁾廣生⁽¹⁴⁾。云、功成名遂⁽¹⁵⁾、身退⁽¹⁶⁾天之道也⁽¹⁷⁾。

〔師は問うた〕教・律・論の三蔵である一切の文義教理を包摂した仏教の教説は、汝の舌の上にあるか〔一大蔵教を汝は言い得るか〕。

〔惠蔵主は〕言った。一つの根元的な活力が無言で形あるものを支えています。〔師は〕尋ねた。いったい何故に言詮を用いるのか。〔惠蔵主は〕言った。生きとし生けるものは、どこに向かってその公平さを感謝いたしましたよう。

〔師は問うた〕花は一言も話さない〔無心である〕。侍者の本分はどのようなものだ。〔昌知客は〕言った。微笑するのみです。師は直ちに打って言った。近いことは近いが、そうかといえはそうではない〔まだ不十分である〕。〔昌知客は〕臂を掉って立ち去った。

〔師は問うた〕誠実な心そのまま修行完成の道場である時はどうか。〔大直は〕言った。身は心中にあります。〔師は〕尋ねた。更には無心であるか。〔大直は〕言った。心性は全身であり、全身は心性そのものであります。

〔師は問うた〕曲は曲のままそれが真実の姿であるとはどういうことか。〔能直は〕一円相を画いて立身又手した。師は言った。花を引くことは汝の花を引くに任せるとしよう。僧はそこで問訊低頭して出て行った。〔師は〕尋ねた。傍らにいる者〔南英謙宗か〕の会得するところはどうか。〔南英謙宗は〕言った。功業も成り名譽も揚った時、

祖芳

以^テ竹篋^ヲ指^テ面前^ヲ云、芳草離^ル披見^ラ一^ニ。直上見^ニ云、遼天鼻孔。直下見^ニ云、怎蔵^レ佗^ヲ。

昌範

家門繁盛、上座如何。云、一人有^レ慶、兆民蒙^レ頼^ヲ。⁽¹⁰⁾

玄殊

文殊騎^ル獅子^ニ、普賢騎^ル象^ニ、上座騎^ル什^ニ。云、瞎^レ不^レ受^ケ靈山^ノ杭^ヲ。聞、瞎^ト上座^ト論訛作^ト广生。云、一喝。師便^チ打^ス。

壽鈞

千鈞^ノ之弩^ハ不^ニ為^シ鼯鼠^ノ發^セ機^ヲ、意志如何。格外^ニ玄機^ヲ為^レ尋^ニ知^レ己^ヲ。聞、即今底又如何。僧便喝^ス。師亦喝^ス。

宗安

安住不動如^シ須弥山^ノ。云、此問太高生^ニ。⁽¹⁵⁾

『耕雲傑堂和尚之入室』口語訳の試み(下) (菅原)

速やかに退いて身を守るのが真実の道です。

〔師は〕竹篋をもって顔面に突き出して言った。芳しき草花(祖芳)は披見を離れているか。〔祖芳は〕真上を見上げて言った。鼻が天までのびます。〔また祖芳は〕真下を見て言った。どうしてかそれを蔵しましょう。

〔師は問うた〕家風が愈々隆盛となるが、上座(昌範) 汝はいったいどうだ。〔昌範は〕言った。一人に慶き事があるならば、万民はこれに頼ります。

〔師は問うた〕文殊菩薩は獅子に騎り、普賢菩薩は象に騎っているが、上座(玄殊) 汝はいったい何に騎るのか。〔玄殊は〕言った。盲目の驢馬は靈鷲山の杭(金波羅華か)を受けません。〔師は〕尋ねた。盲目の驢馬と上座と区別がつかぬがどうだ。〔玄殊は〕言った。一喝します。師は直ちに打った。

〔師は問うた〕千鈞の重さの弓(大弩)は、はつかねずみのようなちやちなものを獲るためには発射せぬとは、その真意はどのようなものだ。〔壽鈞は言った〕宗師家の偉大なる接化の働きは、真箇の知己を釣り上げるためのものです。〔師は〕尋ねた。汝の只今の境地はどうだ。僧(壽鈞)はすぐに喝した。師もまた喝した。

〔師は問うた〕身も心も安んじ不動なるさまは、正に須弥山のように

『耕雲傑堂和尚之入室』口語訳の試み(下) (菅原)

師打云、舌頭如何引地。⁽¹⁶⁾

祖竹

心与竹俱虚。時如何。云、裡頭無句。⁽¹⁷⁾
續師打云、抱臆叫屈。⁽¹⁸⁾

祐尊

知尊貴一广一路。云、高明朗大虚。⁽²⁰⁾
云、不墮尊貴一广又在广。云、一
片月生海幾家人上樓。⁽²¹⁾

守簡

莫守寒岩異草青、坐看白雲宗。⁽²²⁾
不妙、意旨如何。云、帰根得旨、
隨宗失照。聞、帰根作广生。云、
密々処難道。

性学

学得底任你、悟得底作广生。打手云、
将謂胡鬚赤更有赤鬚胡在。聞、

であるぞ。「宗安は」言った。この問いは甚だ高慢です。師は打って言った。舌は何故抜け落ちるのだ。

〔師は問うた〕心と竹(対境)共に虚妄なる時はどうだ。〔祖竹は〕言った。この中は全て空無です。直ちに師は打って言った。盗人が証拠品を抱えながら無実を叫んでいるぞ。

〔師は問うた〕本来具有的の靈活なる本性を知り得るか。〔祐尊は〕言った。天は大虚空に明々として開けています。〔師は〕言った。尊貴をも超越して自由無礙であるか、それとも尊貴に留まっているか。〔祐尊は〕言った。明月が海より天空に昇ったがために、どれほどの人が樓閣に上って魅了されたことでしょう。

〔師は問うた〕冷ややかな巖頭、珍しき草木を大切に守ることなく、白雲を打ち砕いてその根本を最上として執せずとは、どのような意だ。〔守簡は〕言った。根本のところに帰居しその旨を会得しても、真実のところ随って悟りの跡形をも留めないことです。〔師は〕尋ねた。根本のところへ帰るとは、いったいどのような意だ。〔守簡は〕言った。仏祖が親密に伝え来ったところは、容易に言い得ることはできません。

〔師は問うた〕汝の学び得たところはともかくとして、悟り得たところはどうか。〔性学は〕手を叩いて言った。胡人の鬚は赤いと思っ

諍訛什广処。

祖鏡

鏡分ニ金殿燭、上座分上作广性。云、眼中童子面前人。

禪源

是曹源一滴水、如何領解。視上下云、露無辺。聞、已是一滴水、為什广。露無辺。云、心外無法、滿目青山。

徳知客

客散ニ雲樓ニ酒椀乾、知賓底作广生。云、一睡霖語為誰親。師収ニ竹篋合眼云、人相形如ニ重瞳子。

傳侍者

国師喚ニ侍者、意旨如何。云、喏。聞、莫ニ汝辜ニ負吾ニ好。云、喏々。

浄見

見ニ明星ニ時如何。云、祖祢不了、禍。〔耕雲傑堂和尚之入室〕口語訳の試み(下) (菅原)

ていたら、更に赤鬚の胡人がいました。「師は」尋ねた。言葉では捉え得ぬ肝要のところはどこだ。

〔師は問うた〕鏡(般若の智慧)は黄金の宮殿の燭とは遙かに異なる。上座(祖鏡)の本分はどのようなものだ。〔祖鏡は〕言った。眼中に映っている童子は目の前の童子です。

〔師は問うた〕曹溪六祖の法源より流出した法をどのようにか會得した。〔禪源は〕眼を上下して言った。無辺を露します。〔師は〕尋ねた。すでに曹溪六祖の法源そのものであれば、何故に無辺を露す。

〔禪源は〕言った。この心の外にあらゆる存在、現象はありません。見渡す限り青山です。

〔師は問うた〕客は高殿に散在し、酒を盛る椀はすっかり乾ききつている。客の接待を司る知客和尚の心得はどのようなものだ。〔徳知客は〕言った。一睡の寝ごとはいったい誰のためにか親密となり得ましょう。師は竹篋を収めて眼を閉じて言った。人の姿形は二重瞳のようなものだ。

〔師は問うた〕南陽慧忠国師が侍者を三たび召喚したが、その真意はどのようなものだ。〔傳侍者は〕言った。はい。〔師は〕尋ねた。汝は私を欺くことがなければよいぞ。〔傳侍者は〕言った。はいはい。

〔師は問うた〕明星を見た時はどうだ。〔浄見は〕言った。祖先(宗

『耕雲傑堂和尚之入室』口語訳の試み(下) (菅原)

及^ブ兒孫^ニ聞^ク、喚^デ作^ス甚^ク廣^ク禍^ト。云^ク、瞎^コ却^ス眼^ヲ睛^ヲ。聞^ク、更^ニ及^ブ兒孫^ニ。云^ク、我^ハ与^ト情^ト同^ト道^ス。

了月⁽³⁶⁾ 月色^ニ靜^ニ中^ニ看^シ。云^ク、永^ク夜^ク清^ク宵^ノ何^ノ所^ノ為^レ。

高^ニ声^ニ云^ク、何^ノ所^ノ為^レ。

梵^一 一^ニ人^ヲ傳^テ虚^ヲ、万^ニ人^ヲ傳^テ実^ヲ、意^旨如何^ク。云^ク、

畢^ク竟^ク空^ニ。故^ニ無^ク所^レ得^ル、是^レ名^ニ般^ノ若^ノ波^ノ羅^ノ蜜^ト。聞^ク云^ク、為^ニ什^ノ广^ガ。又^レ道^ハ不^レ名^ニ般^ノ若^ノ波^ノ羅^ノ蜜^ト。云^ク、一^ニ人^ヲ傳^テ虚^ヲ、万^ニ人^ヲ傳^テ実^ヲ。

祖⁽³⁹⁾ 聞⁽⁴⁰⁾和^シ舒^ク兒^ヲ打^テ云^ク、你^ハ得^ル和^シ舒^ク。云^ク、

雨^ノ打^ス北^ノ池^ノ蓮^ヲ。聞^ク云^ク、打^テ禪^ノ床^ヲ云^ク、更^ニ有^ル那^レ一^ノ棒^ニ在^リ。云^ク、扠^テ袖^ヲ便^チ行^ク云^ク、不^レ干^セ某^ノ甲^ノ事^ニ。収^テ竹^ノ篋^ヲ呵^ク大^ク笑^ス。

義⁽⁴³⁾ 義^ハ從^リ豊^カ年^ニ出^ス、意^旨如何^ク。云^ク、隨^フ順^シ。

〔祖〕がなし遂げなかつたら、その禍いは兒孫にまで及びます。〔師は〕尋ねた。いったいどのような禍いと呼ぼう。〔浄見は〕言った。盲目となつてしまいます。〔師は〕尋ねた。更にその禍いは兒孫まで及びか。〔浄見は〕言った。私と大地有情と一緒に成道します。

〔師は問うた〕月光(智慧の光明)を三昧中にみることができるか。〔了月は〕言った。この清き宵に何のなすすべがありません。〔了月は〕声を張り上げて言った。何たる振る舞いだ。

〔師は問うた〕一人が事実無根なることを伝えたために、万人に伝承されているうちに事実となるとはどういう意だ。〔梵一は〕言った。結局空が無所得であるから、これを般若波羅蜜と名づけます。〔師は〕尋ねて言った。何故にまた般若波羅蜜と名づけないと言うのか。〔梵一は〕言った。一人が不実を伝えたために、万人に伝承されているうちに事実となります。

刺刺しい容貌、穏やかな容貌。〔師は〕打って言った。汝は穏やかで伸びやかであるか。〔祖聞は〕言った。雨は北池の蓮の上に降ります。〔師は〕尋ねて禪床を一下して言った。更に肝要なる一手があるか。〔祖聞は〕言った。袖を扠って立ち去ります。〔師は〕言った。私事には関わらぬ。〔師は〕竹篋を収めてからからと大笑いした。

〔師は問うた〕義は実り豊かな年に生ずるとはどのような意だ。〔義

道仙

世間^(ニ)無^(シ)碍礙^(一)。
学道^(カ)歟^(カ)仙道^(カ)歟^(カ)。云^(ク)、曹溪門下不^(レ)論^(セ)俗
談^(ラ)。聞^(ク)、如何^(レ)是^(レ)曹溪門下事^(ノ)。僧便^(チ)喝^(ス)。
師便^(チ)打^(ス)。

祖泉

泉声^(ハ)午夜^(ノ)後⁽⁴⁵⁾、正當^(ニ)恁^(ニ)广^(ニ)時^(ノ)如何^(ク)。云^(ク)、
天晴^(テ)河漢⁽⁴⁶⁾句^(一)。

禪秋

秋^(テ)収^(テ)冬^(ス)蔵^(ス)(47) 你^(ニ)為^(ニ)什^(ガ)广^(ガ)在^(リ)者^(ニ)裡^(ニ)。云^(ク)、
隱^(密)全^(該)(48) 現^(成)公^(案)。

祖寂

寂^(ニ)光^(ノ)田^(ノ)地^(ノ)無^(シ)人^(ノ)到^(ル)津^(ノ)、為^(ニ)什^(ガ)广^(ガ)在^(リ)者^(ニ)
裡^(ニ)。云^(ク)、寂^(テ)而^(チ)常^(ニ)照^(ス)。

宝圓

圓⁽⁵⁰⁾頓⁽⁵¹⁾教⁽⁵²⁾没^(ス)人^(情)、意^(旨)如何^(ク)。云^(ク)、還^(シ)我^(ニ)
話^(頭)来^(ル)。

玄芳

如何^(レ)是^(レ)玄^(路)(52) 云^(ク)、且^(ク)行^(ク)且^(ク)語^(ル)、離^(ル)地⁽⁵¹⁾
一^(寸)二^(寸)。

『耕雲傑堂和尚之入室』口語訳の試み(下) (菅原)

順は」言った。世俗の道に順いながら、なお礙げなきことです。

「師は問うた」汝は仏道を学んでいるのか、それとも仙人の道術を学んでいるのか。「道仙は」言った。曹溪六祖の法源より流出した門下は、世俗の談話は致しません。「師は」尋ねた。どのようなものがあったい曹溪六祖門下の肝要のところだ。僧(道仙)はそこで一喝した。師は直ちに打った。

「師は問うた」水の音は真夜中を過ぎたころが最も佳いが、正にこの時はどうだ。「祖泉は」言った。大空は晴れ渡り無辺際を語っています。

「師は問うた」秋に収穫し冬に蓄える。汝は何故にここにいるのだ。「禪秋は」言った。真実の姿の全現として今ありえています。

「師は問うた」悟りの境涯は人の到り得るところのものではないが、何故にここにあるか。「祖寂は」言った。静寂にして常に光り輝いています。

「師は問うた」天台円教の教えは人情を寄せつけない。その意はどうだ。「宝圓は」言った。私に話頭を返して下さい。

「師は問うた」有無迷悟の二見を超えた空寂の路とはいかなるものだ。「玄芳は」言った。行じながら説き、大地を隔ること一寸、二寸です。

『耕雲傑堂和尚之入室』口語訳の試み(下) (菅原)

道貞

元亨利貞乾徳、如何得道。云、眨眼。
云、不見纖毫也。太奇。聞、誦
訛在甚广処。云、有意氣時
(添意氣。不風流処亦風) (56)
流。

祖實

実相無相時如何。云、開眼也著、合眼
也著。(58)

祖教

祖教春回广。云、雪裡梅花只一枝。(60)

祖明

不思善不思惡、當恁广時、那个是明上
座本来面目。云、以両手拶面門。(61) (62) (63)

清透

直透万重関看。僧便喝。師便打。

祖仙

山孤峻在地方、正當恁广時如何。堅
起拳頭。師便打云、伊广繫駟櫛。弘

〔師は問うた〕元・亨・利・貞(仁・礼・義・知)は天の持つ四つ
の徳であるが、得道とはどのようなことだ。〔道貞は〕言った。瞬き
するその瞬間のところだ。〔また道貞は〕言った。ほんの僅かなも
のをも見ない。そこが甚だすばらしいことです。〔師は〕尋ねた。言
葉をもって表現し得ぬ肝要のところはいったいどこだ。〔道貞は〕言
った。いやが上にも意気があがり、殺風景さにも味があります。

〔師は問うた〕宇宙の真実相が相對差別を離れた真実絶対の時ほど
うだ。〔祖實は〕言った。眼を開いても、また眼を閉じてもびたりと
真実を見て取ります。

〔師は問うた〕祖師(達磨)の教えを生かし切っているか。〔祖教
は〕言った。雪の中に咲いている梅の花にさえ、真実が顕現していま
す。

〔師は問うた〕是非善惡の對立を透脱した正にその時、上座(祖明)
の本来の自己はいったいどこにある。〔祖明は〕言った。両手で顔面
を一突きします。

〔師は問うた〕直に万重の関門を突き破ってみよ。僧(清透)はす
ぐに一喝した。師は直に打った。

〔師は問うた〕山は峻険と聳え、その中に物を生ずる力を具えてい
る。正にこのような時はどうだ。〔祖仙は〕拳を立てた。師は直に打

袖ヲ便行。回顧テ云、半ハ是思レ君、半ハ恨ム君。

祐聖 聖諦亦タ不レ為ノ時ノ如何。云、竹ハ在ニ竹位ニ前後際断。

道順 莫キヤ速順相争ヒ一フ广コト。云、作用自無心。打云、猶シ一重関。

祖祐⁽⁶⁹⁾ 祖意教意レ是同レ是別⁽⁷⁰⁾。云、風頭稍硬、暖処向一量⁽⁷¹⁾。

祖慶⁽⁷²⁾ 祖師是把門ヲ沃、作守ニ那ノ門ヲ。云、只在ニ此山中ニ雲深不レ知レ処⁽⁷³⁾。

隔庵之淨頭 不染汚ノ一句、速道々々。僧便喝。師便打。

同堂司⁽⁷⁵⁾ 衆病悉除、性珍手段更治ニ貧苦ニ看。云、心無レ怪、惜ム象馬七珍ヲ。師展ニ両手ヲ。云、我与你著看。云、君子不レ奪ニ人。

『耕雲傑堂和尚之入室』口語訳の試み(下) (菅原)

って言った。このロバをつなぐ棒杓め。「祖仙は」袖を払って立ち去り、振り返って言った。半ば君を慕い、半ば君を恨みます。

〔師は問うた〕真理にも執しない時はどうだ。「祐聖は」言った。竹には上下の節があるが、それぞれが自らの位に住して絶対の相を現成しています。

〔師は問うた〕真理に随順することがなければ互いに争うか。「道順は」言った。その働きは思慮分別を絶した絶対の真実であります。

〔師は〕打って言った。まだ透脱し得ぬぞ「未だ不十分の漢であるぞ」。

〔師は問うた〕祖師西来意(達磨の伝えた仏法の真意)と三乘十二分教に説かれる教典の意は同であるのか、それとも相違するものであるか。「祖祐は」言った。冷たい風がまだ吹いています(暖処向一量)。

〔師は問うた〕祖師は門の境界を取り除いて、いったいどのような門を守るのか。「祖慶は」言った。この山中(仏法の世界)は非常に奥深くて量り知りありません(無辺際です)。

〔師は問うた〕思慮分別をもって汚されぬ一句をさあ早く言ってみよ。僧(隔庵之淨頭)は直ちに一喝した。師は透かさず打った。

〔師は問うた〕衆生の病を滅除する性珍の手だてをもって、更に貧苦を治癒してみよ。「性珍は」言った。心に疑いなく、象・馬等の七珍(宝)を大切にします。師は両手のひらを開いて差し出して言った。

所好⁽⁷⁸⁾。聞、山僧是不⁽⁷⁸⁾君子、上座不⁽⁷⁸⁾是長老。師高声喚云、性珍々々。喏。師便打云、抱⁽⁷⁸⁾賊叫⁽⁷⁸⁾屈。拍手、呵々大笑。

祖見⁽⁷⁹⁾ 如何是沙弥同行見解⁽⁸⁰⁾。云、去年梅今歳柳、顔色馨香只依⁽⁸¹⁾舊。

祖勤⁽⁸²⁾ 善財德雲相見時如何。云、覓⁽⁸²⁾知不⁽⁸²⁾可⁽⁸²⁾見⁽⁸²⁾君。輪槌打不開時如何。云、當退⁽⁸⁴⁾三千。

侍衣⁽⁸⁵⁾ 世尊金襴衣与勝上座小衣⁽⁸⁶⁾相去⁽⁸⁶⁾多少。云、只⁽⁸⁷⁾能相續⁽⁸⁷⁾名⁽⁸⁷⁾主中主。聞、主與主更⁽⁸⁸⁾弁⁽⁸⁸⁾諱⁽⁸⁸⁾詭⁽⁸⁸⁾看⁽⁸⁸⁾。云、但能⁽⁸⁸⁾不⁽⁸⁸⁾觸⁽⁸⁸⁾當今諱⁽⁸⁸⁾、還勝⁽⁸⁸⁾前朝断舌才⁽⁸⁸⁾。師便打云、莫⁽⁸⁹⁾向⁽⁸⁹⁾樽前⁽⁸⁹⁾唱⁽⁸⁹⁾。鷓鴣⁽⁸⁹⁾。

私と汝とを明らかにしてみよ。「性珍は」言った。学徳のある立派な人は、人の愛好するものを奪い取ることはしません。「師は」尋ねた。山僧(私)は君子ではないし、上座(性珍)も長老ではない。師は声を張り上げて叫んで言った。性珍性珍。「性珍は言った」はい。師は直ちに打って言った。盗人が証拠品を抱えて無実と叫んでおるわい。「師は」拍手してからからと大笑いした。

「師は問うた」沙弥と童子行者の見解はどのようなものだ。「祖見毛頭は」言った。去年の梅と今年の柳とは、その色香は年々歳々同じであります「悟ったとしても別に殊更変わりはありません」。

「師は問うた」善財童子と徳雲比丘と相い見えた時はどうだ。「祖勤毛頭は」言った。眞実のみを求めてその人を見てはなりません。「師は問うた」鉄鎚を大車輪のようにふりまわしても打開し得ない時はどうだ。「祖勤毛頭は」言った。退却すること三千里です。

「師は問うた」世尊が摩訶迦葉に伝えた金襴衣と勝上座の小衣(五条衣)とどれほどの相違があるか。「侍衣は」言った。仏法を正しく護持相續して初めて眞の本分人と言えます。「師は」尋ねた。本分人と本分人と更に肝要なところを弁別してみよ。「侍衣は」言った。ただ即今の諱にかかわらず、しかもなお前朝の断舌の才に勝つています。師は直ちに打って言った。酒樽の前で鷓鴣曲を歌うのはやめよ。

おわりに

本稿は、前稿（『禪研究所紀要』第二十三号所収）の続編にあたるものである。『耕雲傑堂和尚之入室』は、傑堂能勝と門下の弟子七十八人の問答商量を収録したものであり、前稿はその中三十四人の入室者についての試訳であるが、本稿では残る四十四人について口語訳を試みた。

その端緒は、筆者が本学大学院博士課程に入学した平成三年に始まる。指導教官の竹内道雄教授より、博士課程の「研究指導」として『耕雲傑堂和尚之入室』についての共同研究が提言され、竹内教授のご指導の下、博士課程の在籍者、畏友李乾熙、矢沢仁両氏と筆者を加えて四人で開始された。

先ず、本研究を進めるに当たり、竹内教授より、只管打坐を宣揚する洞門にとって、後に「越後の四箇の古道場」の本寺となり、大叢林として隆盛を遂げた耕雲寺において、当時すでに「入室独参」が行われていたことは、中世曹洞宗教団にとって注目すべきことであり、特に、これまで「入室独参」について、師資間にいかなる問答商量がなされたか

を証する資料は殆んど知られておらず、その意味でも本書の研究が重大な意義を有することのご教示を得た。

顧みれば、共同研究は毎回担当者を中心に語義・典故等を詳細に検討し、訳文を試みるが、なにせ本書は、師資間の言詮不及底の境涯の故、難解であり、その進展は遅々たるものであった。

当初の目標は、三年間で何とか読み終える予定であったが、竹内教授も要職に在られてご多忙であったうえ、寺院の禅籍資料調査・史跡調査等のフィールドワークも加わり、博士課程修了時点で全体の三分の一を終えたところであった。幸い筆者は大学院修了後も本学禅研究所に在籍しながら、引き続き大学院の共同研究に参加させていただく機会を得、出来上がったのが前稿である。その後、諸般の事情で共同研究も不可能となった。このままでは長き歳月を費やしてきた共同研究も途中で途絶えるかに思えた。

しかし、竹内教授のご教示をもって、同輩諸氏と進めてきた研究をこのまま中断するには、なんとも遣る瀬ないものがあり、共同研究の難しさを痛感した。筆者一人の力ではなんともならぬが、不完全ながらも一応の区切りをつけ

たいとの念願から出来上がったのが本稿である。

もとより筆者の浅学非才に加え、短期間でまとめざるを得なかった事情もあり、多くの誤りを犯していると思われる。不完全な箇所は、識者のご叱正を乞い徐々に訂正補筆していきたい。

本稿の成立にあたっては、特に竹内道雄教授には貴重な資料の提供に加え、公私にわたり最後までご指導いただいたことに対し、まず、満腔の謝意を申し上げます。また、禅語の解説においては、本学の鈴木哲雄教授に大学院の演習等で懇切なるご指導をいただいた。先生の一字一句も忽せにしない綿密なご指導がなかったら、本稿は到底成し得なかった。ここに深く感謝申し上げます。

さらに、当初からこの共同研究に参加された李乾熙、矢沢仁の両氏には多くの示唆をいただき、途中からこの研究に加わった辻哲夫氏には、実際に臨済宗の「入室独参」を体験され、貴重な意見を得ることができた。ここに一人ひとりに感謝申し上げます。

注

(1) 蔵主 禅院の衆僧の閲蔵看経を掌る役職で、蔵殿の主管である。蔵殿は古くは経蔵と看経堂を兼ねていたが、後に分れて、それぞれ看経堂首座と蔵殿主がこれを管理したが、いずれも蔵主の配下であった。しかし、南宋以降、禅院では経蔵の機能は仏殿に移り、看経堂の機能は衆寮に移ったために、蔵殿は輪蔵としての名を留めるに過ぎなくなった。知蔵と同じ。

(2) 一大蔵教 経・律・論の三蔵を指し、釈尊の生涯において説かれた大乘・小乗・三蔵・十二部諸教を総称するという。

(3) 『白雲守端禅師語録』下(統蔵二二〇、一九五表上)・『円悟語録』十(大正蔵四七、七六〇c)に「一氣不言含有象、万靈何処謝無私」とある。一つの生命力が何も言わないで形あるものを支えている。一切の生命あるものはどこに向って平等性を感謝すべきであろうか。

(4) 分上 自分の本来のあり様。自己の本分。

(5) 似則似、是則未是 近いことは近いが、そうかといえはそうではない。未だ不十分の意。『碧巖録』九八、本則著語(大正蔵四八、一二二b)。

(6) 直心是道場 誠実な心が修行を完成させる場である。

『維摩経』菩薩品(大正蔵一四、五四二c)・『六祖壇経』定慧(大正蔵四八、三五二c)。

(7) 曲不蔵直 曲線には真直ぐなところがないが、それがそ

のまま本来の姿であること。『宏智録』四(大正蔵四八、五三a)・『明覚禪師語録』二(大正蔵四七、六七六c)・『碧巖録』九〇、本則著語(大正蔵四八、二二四c)・『虚堂語録』三(大正蔵四七、一〇〇七c)。

(8) 『老子道経』上(新釈漢文大系七、二四、明治書院)に「功成名遂身退天之道」とある。功成り名遂げた後、その榮譽の地位から身を退ける謙讓な態度こそ、天の道にかなった振舞いであるという意。

(9) 面前 眼の前、面と対しての意。

(10) 『書経』(新釈漢文大系二五、三三八)に「一人有慶、兆民頼之、其寧惟永」とある。一人に慶き事があるならば、天下の兆民はこれにたより、天下の安らかなことは永く続くであらうということ。

(11) 『伝灯録』十三、福寿和尚章(大正蔵五一、三〇二a)

に「問文殊騎師子普賢騎象、未審釈迦騎什麼」とある。

(12) 瞎驢 盲目の驢馬。転じて心眼の開けぬいたって愚かなるものをいう。『臨濟録』行録(大正蔵四八、五〇六c)に「向這瞎驢辺滅却」とある。

(13) 千鈞之弩不爲鼯鼠而発機 千鈞の重さのある大弩は、はつかねずみのようなちやちなものを獲るためには発射することはない。大志ある者は、細事に心を動かさぬ喩。『伝灯録』十二、西院恩明章(大正蔵五一、二九八c)・『碧巖録』四四、頌評唱(大正蔵四八、一八一c)。

『耕雲傑堂和尚之入室』口語訳の試み(下)(菅原)

(14) 格外玄機 大悟した人の境界。分別情慮を絶した玄妙な機用。『碧巖録』三八(大正蔵四八、一七六c)。

(15) 太高生 はなはだ高慢なこと。『臨濟録』行録(大正蔵四八、五〇六a)。

(16) 『碧巖録』八、本則著語(大正蔵四八、一四八b)に「舌頭落地、錯就錯」とある。舌が抜け落ちること。誤った仏法を説いた報い。

(17) 裏頭 なか、うちの意。

(18) 無句 四句(有・無・亦有亦無・非有非無)の一つ。空見・断見などの空無虚無の立場に立つこと。

(19) 抱臆叫屈 盗人が盗んだ品物を手にかかえながら無実を叫ぶこと。『無門関』三〇(大正蔵四八、二九七a)・『虚堂語録』二(大正蔵四七、九九八a)・『碧巖録』七九、本則著語(大正蔵四八、二〇五c)。

(20) 尊貴 尊いこと、又たつとい人。本有天然の君をいう。『永平広録』八、冬至小参(道元禅師全集第四、一二六、春秋社)に「兄弟、大功熟処、一陽即生。万法得帰、方見尊貴」とある。

(21) 尊貴墮 曹山三種墮の一つ。墮は自由無礙の意。尊貴に留ることなく、尊貴を超えること。

(22) 一片月生海、幾家人上樓 明月が一つの海から天空に昇ったために、どれほどの人が樓閣に上って魅了されたことか。『密菴和尚語録』(大正蔵四七、九六六c)。

『耕雲傑堂和尚之入室』口語訳の試み(下) (菅原)

- (23) 『碧巖録』二二五、頌評唱(大正蔵四八、一六六c)・『從容録』八九、本則評唱(大正蔵四八、二八五a)・『五灯会元』十四、大陽警玄章(統蔵一三八、二六二表上)に「莫守寒巖異草、坐却白雲宗不妙」とある。
- (24) 將謂胡鬚赤更有赤鬚胡 胡人のひげは赤いと思っていたら、さらに赤いひげの胡人がいた。思わぬところにすごいやつがいたという意。賞賛した言葉。『雲門録』上(大正蔵四七、五五二c)・『円悟語録』十八(大正蔵四七、七九九c)・『正法眼蔵阿羅漢』(道元禪師全集第一、四〇三―四〇四)・『永平広録』七(道元禪師全集第四、六四)。
- (25) 『禅林僧宝伝』十一(統蔵一三七、二四四表上)に「鏡分金殿燭、山答月樓鐘」とある。金殿は黄金で作った立派な宮殿。月樓は月光をあびた高殿。
- (26) 『五灯会元』十六、崇福德基章(統蔵一三八、三二三)に「水底金鳥天上日、眼中瞳子面目人」とある。眼中の童子は目前の童子、水底の太陽は天上の太陽の意。
- (27) 曹源一滴水 六祖慧能の法源より流出した正法の意。祖師西来意と同義。『碧巖録』七、本則評唱(大正蔵四八、一四七c)に「如何是曹源一滴水、法眼云、是曹源一滴水、其僧惘然而退、韶在衆聞之忽然大悟、後出世、承嗣法眼、有頌呈云、通玄峯頂、不是人間、心外無法、滿目青山」とある。
- (28) 心外無法、滿目青山 法のほかに心はなく、その無心の法の顯現として山を見るときは見渡す限り青山で、山になり
- きった様をいう。『從容録』九一、頌著語(大正蔵四八、二八六b)。
- (29) 重瞳 ひとみが二つあること。二重瞳。
- (30) 『無門関』十七(大正蔵四八、二九五a)・『伝灯録』五、南陽慧忠章(大正蔵五一、二四四a)に南陽慧忠国師が侍者を三たび召喚した故事にちなむ公案があり、常に本来の自己に覚醒すべきことを述べている。
- (31) 喏 上司や目上の人に面謁するときに発する語。「ハハッ」という応諾の声。
- (32) 辜負 裏切ること。「孤負」に同じ。
- (33) 『正法眼蔵發菩提心』(道元禪師全集第二、一六四)・『永平広録』一(道元禪師全集第三、二八)に「釈迦牟尼仏言、明星出現時、我与大地有情同時成道」とあるが、出典は未詳。但し、『道元禪師全集』第二卷の『正法眼蔵發菩提心』頭註において、河村孝道博士は『修行本起経』下を掲げている。
- (34) 『統古尊宿語要』三、保寧勇章(統蔵一一八、四七九裏下)・『從容録』八五、本則著語(大正蔵四八、二八一c)に「祖禰不了、殃及児孫」とある。祖先(祖師)がそれに手をつけながら成し遂げなかったならば、児孫がその殃を蒙って難儀するということ。
- (35) 瞎却、瞎は盲目、却是助詞。盲目にしてしまうという意。『無門関』二八(大正蔵四八、二九六c)。
- (36) 月色 月の光り。月の色。『枯崖和尚漫録』上(統蔵一

四八、七九裏下)に「月色清明松聲蕭騷」とある。

(37) 高声 たかい声、大音声。

(38) 一人伝虚万人伝実 『伝灯録』 十八、竜華靈照章(大正蔵五一、三五二b)・『碧巖録』 四七、頌著語(大正蔵四八、一八三b)・『永平広録』 二(道元禪師全集第三、七六)にある。事実無根のことが人々に伝承されているうちに事実となること。釈尊が悟られた真実は、各自が自悟自得すべきものであるが、摩訶迦葉一人がこれを伝えたために、人々が真理は伝えられると思いいこむという意である。

(39) 悦叟祖閻のこと。雲窓祖慶の法嗣。雲洞庵三世。福勝寺開山。

(40) 閻々 是非を争論すること、又その様。

(41) 和舒 和いでのかやかなこと。

(42) 雨打北池蓮 響が声に応ずるように、呼応して隙間のないこと。師家と学人の機機投合に喩えた語。

(43) 『虚堂語録』 九(大正蔵四七、一〇五二c)に「義出豊年」とあり、『文中子』 九、立命篇(二十二子、一三二七、縮印浙江書局彙刻本、上海古籍出版社)に「仁生於歎、義生於豊」とある。豊年だと人氣が穏やかだの意。

(44) 仙道 仙人の道術。

(45) 『白雲守端禪師語録』 三(統蔵一二〇、二二五裏上)・『虚堂語録』 三(大正蔵四七、一〇〇九c)に「泉聲中夜後、山色夕陽時」とある。水の音は真夜中を過ぎたころが最も佳

『耕雲傑堂和尚之入室』口語訳の試み(下)(菅原)

いという意。

(46) 河漢句 取りとめない言葉。河漢は天の川で遠く天空にあるからいう。

(47) 秋收冬蔵 秋に収穫して冬に蓄えること。『荀子』 王制篇九(諸子集成二、荀子集解五、一〇五、中華書局出版)に「秋收冬蔵、四者不失時」とある。

(48) 『碧巖録』 五四、垂示(大正蔵四八、一八八c)に「穩密全真」とある。穩密は親密。思慮分別の及ばない奥深い境界を指し、全真は真実な姿の全現をいう。現成公案と同義か。

(49) 寂光田地 真智を会得した境涯。『宏智録』 四(大正蔵四八、四八b)に「寂光田地看生涯」とある。

(50) 円頓教 天台円教の別名。

(51) 還我話頭来 私に話頭を返せ。こちら側の答に相手の対応が噛み合わない時に問答を起点に戻す時に用いる。

(52) 玄路 洞山三路の第二。玄妙の路をいい、有無迷悟などの二見を超越した空寂の路を指す。『洞山録』(大正蔵四七、五一一a)に「我有三路接人、鳥路玄路展手」とある。

(53) 元亨利貞 易において乾(天)の卦の持つ四つの徳。元は万物の始、春に属し、その徳は仁、亨は万物の長、夏に属し、その徳は礼、利は万物の遂、秋に属し、その徳は義、貞は万物の成、冬に属し、その徳は智である。『周易上経』 乾(新釈漢文大系三三、九四―一一三)。

(54) 織毫 すこし、わずか。

『耕雲傑堂和尚之入室』口語訳の試み(下) (菅原)

- (55) 也大奇 すばらしいことだ。驚嘆して発する言葉。
- (56) 『白雲守端禪師語録』四(統藏一二〇、二二八裏下)に「有意氣時添意氣、不風流処、亦風流」とある。『耕雲傑堂和尚之入室』口語訳の試み(上)、「祐林」の項及び注(67)参照。
- (57) 『無門籍』六(大正藏四八、二九三c)に「世尊云、吾有正法眼藏涅槃妙心実相無相微妙法門」とある。宇宙万象の真実相は、相対的差別の相を離れた真実絶対のものであること。
- (58) 開眼也著、合眼也著 目をあけても、目をつぶってもぴたりと見て取ること。『碧巖録』十、頌評唱(大正藏四八、一五〇c)。
- (59) 『碧巖録』序(大正藏四八、一三九c)に「爾来二百余年、嶠中張明遠、復鏤梓、以壽其伝、豈祖教回春乎」とある。祖教は祖師の教え、特に達磨の教えを指す。回春は生かすこと。
- (60) 雪裡梅花只一枝 雪の中に咲いている梅の花にさえ、真実が顕現していること。『如浄語録』上(大正藏四八、二二二―二二三)・『正法眼藏梅華』(道元禪師全集第二、七〇)・『永平広録』六(道元禪師全集第四、四四)。
- (61) 『六祖壇経』行由(大正藏四八、三四九b)・『無門関』二三(大正藏四八、二九五c)に「不思議不思悪、正與麼時那箇是明上座、本来面目」とある。
- (62) 拶 ぐさりと一突きすること。
- (63) 面門 顔面のこと。
- (64) 『臨濟録』行録(大正藏四八、五〇六a)に「直透万重関、不住青霄裡」とある。万重の関門を突き破って、さらに蒼穹の上へも超え出ていること。師の宗旨をことごとく知りつくしたが、その宗旨の中に留まっていないこと。
- (65) 繫驢橛 驢馬をつなぐ棒杙。人を括りつけて身動きできないようにするものの喩え。『臨濟録』示衆(大正藏四八、四九七c)・『碧巖録』一、本則著語(大正藏四八、一四〇a)。
- (66) 回顧 振り返り見ること。
- (67) 聖諦不為 真理にも執着しないこと。不為は不住の意。『従容録』五、本則評唱(大正藏四八、二三〇b)に「聖諦亦不為」とある。
- (68) 違順 二物对待をいう。『信心銘』(大正藏五一、四五七a)に「違順相争是為心病」とある。
- (69) 祖祐 天鷹祖祐(一三三六一―四一三)か。祖祐は禅門を慕って通幻寂靈に参じ、明德二年(一三九一)入室嗣法し、後撰丹境の永沢寺八世となっている。傑堂は祖祐より約十九歳ほど年下であるが、梅山問本に付法する以前、永沢寺で通幻寂靈に参じていることから、おそらく両者はこの頃より面識があったものと思われる。いずれにしても両者の師弟関係には未だ問題が存するであろう。
- (70) 祖意教意是同是別 『伝灯録』二二、巴陵顛鑑章(大正

蔵五一、三八六a)。祖意は祖師西来意の略。達磨の禅風。教意は仏が衆生のために説いた教えの本意。教外別伝を説く禅門では、祖師西来意を参究し、教意に対して祖意を重んずる。

(71) 風頭稍硬、暖処向——量 典故不詳。『耕雲傑堂和尚之入室』口語訳の試み(上)「高春」項参照。

(72) 祖慶 雲窓祖慶(文安三年四月二十八日寂)。頭窓慶字の法嗣。雲洞庵二世。山形洞春院三世。

(73) 只在此山中、雲深不知処 『従容録』四二、頌著語(大正蔵四八、二五四c)。

(74) 速道 師家が学人に対して、問いせまる時に用いる。さあ早く言え、とうながす語。

(75) 堂司 禅院の六知事の一つ。維那のこと。僧堂を司り、指導の責に任ずる。

(76) 七珍 七宝をいう。特に転輪王が持つという。『首楞嚴經』一〇(大正蔵一九、一五四a)。

(77) 展両手 両の手のひらを開いて差し出すこと。

(78) 君子不奪人所好 君子は人の愛するところのものを奪い取ることはないという意。『通俗編』交際。

(79) 毛頭 『禅林象器筏』(七、職位門三〇六)には「忠日、毛頭未詳、蓋浄人毛髮者、浄髮待詔類乎」とあり、無著道忠は未詳としながらも、衆僧の浄髪を司る役とみなしている。

(80) 沙弥童行見解 『碧巖録』九九、本則評唱(大正蔵四八、

『耕雲傑堂和尚之入室』口語訳の試み(下)(菅原)

二二三a)。童行は童子または童子行者のこと。禅院で出家を志した未得度の童子を指す。

(81) 去年梅今歳柳、顔色馨香依舊 年々歳々花は同じように咲くように、悟っても別に変わりはないこと。『枯崖和尚漫録』中(続蔵一四八、八四表下)。

(82) 善財徳雲相見 徳雲比丘は善財童子が偏参した五三人の善知識の一人であり、善財童子は文殊菩薩の指示により、南方の妙峰山に住む徳雲比丘を訪ね、その教えにより念仏三昧門を伝授されたという。『華嚴経』入法界品(大正蔵一〇、三三四a)。

(83) 輪搥(輪カ) 打不開 輪鏈は鉄鏈を輪のように回すこと。無限にそうやっても打開し得ない堅固さに喩える。『碧巖録』九、頌評唱(大正蔵四八、一五〇a)。

(84) 倒退三千 あとずさりすること三千里。戦いに敗れて退散することから、転じて宗家の機峰に畏れ退くこと。『碧巖録』二、本則著語(大正蔵四八、一四一c)。

(85) 侍衣 衣鉢侍者のこと。ここでは「能上座」のことか。

(86) 小衣 五条衣、安陀会をいう。

(87) 但能相続名主中主 『宝鏡三昧歌』(大正蔵四七、五一五b)。

(88) 『碧巖録』四三、本則評唱(大正蔵四八、一八〇b)に「但能不触当今諱、也勝前朝断舌才」とある。「不触当今諱」とは、今の皇帝の諱に触れてはいない。正位(悟り)に腰を

『耕雲傑堂和尚之入室』口語訳の試み(下) (菅原)

据えていないこと。「前朝断舌才」とは、隋代の李知章は非常に雄弁家であり、聞く人は皆舌を巻いたといわれる。これを断舌の才という。

(89) 『従容録』五五、頌(大正蔵四八、二六二b)に「莫向人前唱鷓鴣」とある。人前で仏法挙揚の鷓鴣曲を歌うのはやめたほうがよいという意。